

上演 12 2025年7月28日（月）2校目 関東ブロック（長野） <b>長野県松本美須ヶ丘高等学校</b> <b>「愛を語らない」</b>	<b>第49回全国高等学校総合文化祭演劇部門</b> <b>第71回全国高等学校演劇大会</b> <b>講評文</b>  <b>生徒講評委員会 担当委員</b> <b>兵庫県立御影高等学校</b> <b>久保 心菜</b>
--	---

この劇を観終わったあと、1冊の小説を読み終えた気分になった。この作品は、文豪の柴山鉄山の生涯について娘の柴山亜伊が書いた自伝的小説を戯曲化したものになっている。金と酒と女に溺れた、鉄山の嵐のような生き様が、娘の視点によって描かれていく。物語が進むにつれて「作家は、全てを書かなくてはならない。余すところなく、隅から隅まで」という言葉に込められた思いが浮き彫りになっていく。表現とは。愛とは。

この物語を通して、「表現」について深く考えさせられた。演劇も、小説も、ひとつの表現方法だ。同じ表現者として、鉄山の生き様には共感できた。鉄山は、不倫も心中も、経験したことを全て小説に表現する。私自身も、役者として与えられた役を実感を持って演じることで、観客に熱とリアルを届けるため、作品と同じ経験をたどることがある。そのため、鉄山の小説に対する姿勢には、尊敬の念を抱いた。

また、劇の演出表現の工夫にも感動した。まさに、「演劇」で「文学」を表現していた。舞台という平面上に斜面を創り出し立体的にするセットは、まさに平面である紙上で登場人物が生きている様を視覚的に感じ、幕が開いてすぐに物語に没入した。人の声で自然音や物音を表現する演出は、小説を読む際に自分の頭の中で声や音を想像することと重なる。また具体物がなく、柴山亜伊を囲む語り等の人間たちが行き交う様子で場面を表現していることで、いつの間にか観客が演劇の読み手となっている。小説は、読み手の想像力によって全て完結する。それを舞台という空間に体現させていたことについて学ばせられることが多くあった。

講評活動の中で、タイトルについて多くの意見が出た。「愛を語らない」というタイトル内の「愛」は鉄山にとって「亜伊」のことなのではないだろうかという意見が出た。鉄山の小説の中に、娘の亜伊はまったく出てこない。それは、鉄山にとっての不器用な愛情表現であったのではないか。小説の中で、父鉄山は、多くの恋愛遍歴を晒し、愛について語ってきた。それを間近で見てきた亜伊の父に関する嫌悪感は、きっと父にもはっきりと分かる形で伝わっていたのだと思う。本当に大事なことは語らない。それが、父から娘への最大の愛だった。奇しくも、父の影を追い、反発しながらも同じ小説家としての道を歩む亜伊。血のつながりのない娘を



心配し、手を差し伸べる母の存在。自由奔放で嵐のように生き、家族のことを顧みなかった父を取り巻く人間たちのドラマが美しく描かれた作品だった。